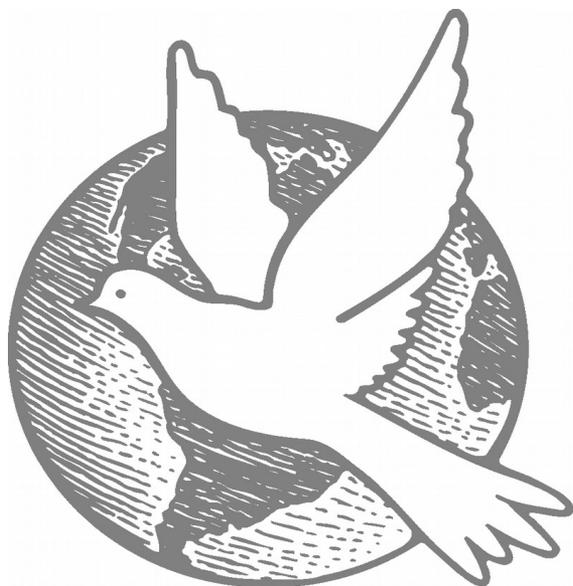


日々の聖句

5月 聖霊（一）



はじめに

聖書にはいくつもの大切な主題があります。それらは創世記から黙示録までの聖書全巻を貫くような形で記されています。聖書の読み方には様々な方法がありますが、一つの主題を追いながら聖書を読んでいくのは、とても有益な方法です。

『日々の聖句』は毎日の御言葉の黙想のために書かれましたが、月ごとに主題を決め、それに関連した聖句を読み進むようにしています。今月と来月は「聖霊」を主題にしています。「聖霊」は大きな主題ですので、どうしても二ヶ月かける必要がありました。

「聖霊」というと、すぐにペンテコステを思い浮かべますが、じつはペンテコステ以前にも、聖霊の働きについて多くのことが聖書に記されています。それで、今月

は創世記からヨハネの福音書まで、ペンテコステ以前に記されている聖霊の働きをたどり、来月はペンテコステ以後、つまり、「使徒の働き」から「ヨハネの黙示録」までを扱います。

聖句は「新改訳2017」から引用してありますが、『日々の聖句』を利用するには、どの訳の聖書でも差し支えありません。ご自分の慣れ親しんでいる聖書をお使いください。

なお、この冊子の末尾に「『日々の聖句』の使い方」をしるしておきましたので、参考にしてください。これを利用する皆さんが、日々に御言葉に養われ、導かれ、さらに主を知ることができまますよう祈ります。

二〇一九年五月

中尾フィリップ

神の霊がその水の面を動いていた。(2)

聖霊は聖書のいちばんはじめから登場します。

聖霊は世界の創造にかかわっていました。創造は三位一体の神の御業でした。建築にたとえるなら、父なる神は設計者、御子イエスは監督者、聖霊は施工者となります。詩篇33・6に「主のことばによつて天は造られた。天の万象もすべて 御口の息吹によつて」とあつて、「ことば」はキリストを、「息吹」は聖霊を示唆しています。

「水の面を動いていた」とあるところは、英語で “hovering over the face of the waters” と訳されます。“hover” というのは、ヘリコプターが空中で静止している状態のことを指しますが、古代の人はヘリコプターを知りませんでしたから、この言葉は、鳥が翼を広げて舞いかけている様子を表すのに使いました。創世記1・2は、

親鳥が卵を抱いて温めたり、雛鳥を翼の下にかくまうように、聖霊が原始の地球を抱きかかえるようにしている姿を描いています。御父も御子も聖霊も世界の創造にかかわりましたが、聖霊はこの世界に対して母性的なかかわり方をしているように思えます。詩篇33・5に「主の恵みで地は満ちている」とありますが、聖霊はこの地を恵みをもつて造り、今もいつしみを注いでいるのです。

創造があつてはじめて世界も、私たちも存在します。創造は私たちの存在の根源です。聖霊は御父と御子とともに私たちの存在の根源になつていてくださるのです。聖霊によつて支えられ、いっくしまれていく「私」。そのことを思う時、神に感謝と賛美を捧げずにはおれなくなります。

祈り 聖霊よ。あなたは私の「はじめ」です。ですから、私は一日をあなたとともに始めます。

神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。(2)

人のからだは、死ねば土と同じ元素に還元されます。「あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ」(創世記3・16)とある通りです。人の命はからだによってだけ支えられているのではなく、神からの息吹きによって支えられています。そしてこの神の息吹きは聖霊を表します。聖霊はあらゆる物の造り主であると共に、あらゆる生き物に命を与える、命の与え主でもあるのです。

しかも、人の命は、他の生物の命とは違っています。他の動物には「たくましく生きる」ことや「賢く生きる」ことはあっても、「より良く生きる」という生き方はありません。まして、「聖く生きる」ということはできません。神のかたちに

創造され、神の性質に与ることを許された人間だけが、「より良く、正しく、聖く生きる」命を聖霊によって吹き込まれているのです。

かつての時代(19世紀)には人類は限りなく進歩していき、地上から戦争や抑圧、飢餓や病気、悩みや嘆きが無くなると信じられていました。その後、第一次、第二次の大戦、戦後の冷戦、そして今日のようなテロの時代を通り、格差社会が生まれているにもかかわらず、多くの人はまだその考えにしがみついています。そして、人々は、より人間らしく生きるよりも動物的になつてきています。人が人としての本来の生き方を取り戻すには、もう一度、命の与え主、聖霊から、その息吹を受ける必要があるのです。

祈り 聖霊よ。私をほんとうに生かす「命の息吹き」をもう一度与えてください。

主は：彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。(30、31)

最初の神殿(幕屋)を作る時、神はベツアエルとオホリアブを聖霊で満たしました。聖霊は人を特別な能力で満たし、神のための働きをさせます。それは新約時代の「聖霊の賜物」に通じるものであつたと思われます。しかし、人の能力に係のある「聖霊の賜物」は、人の人格に係のある「聖霊の実」と全く無関係ではありませんから、ベツアエルとオホリアブは、人格的な面でも聖霊の満たしを受けたことでしょう。

彼らは聖なるものを作るわけですから、その心に神への畏怖がなければできないものではありません。彼らには、自分の腕をふるいたい、それを示したいという思いを捨て、モーセを通して与えられた設計図通りにそれを作るといふ忠実さが要求

されました。また、材料も道具も十分ではない中で、少しの無駄も出さないでそれを作るには忍耐が必要でした。主が、ベツアエルとオホリアブを「知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満た」したというとき、そこには神殿の工作のために必要な技能だけでなく、人格的、信仰的、霊的な面での満たしもあつたことでしょう。

今日、教会での奉仕において、技能だけを重視する傾向があり、技能を神のために謙虚に用いる霊的な訓練がおろそかになっています。信仰のある無しさえ問わず、世の中の経歴だけで教会の重要な働きをさせてしまうこともあります。今日の神殿である教会もまた聖霊に満たされた人によって建てられなければならないのです。

祈り 聖霊よ。あなたの満たしを受けて聖なる務めに就くことができますように。

主の民がみな、預言者となり、主が彼らの上に
ご自分の霊を与えられるとよいのに。(29)

ひとりで民全体の重荷を負っていたモーセに、
主は七十人の長老を与えました。モーセに与えら
れていた主の霊は長老たちにも与えられ、彼らも
またモーセと同じように預言をしました。ところが、
エルダデとメダデのふたりは会見の天幕には
出てゆかず、宿営のなかで、そこで預言をしま
した。それを知ったモーセの従者ヨシユアはエル
ダデとメダデの預言をやめさせるようモーセに注
進しました。

ところがモーセはそれを拒んで「主の民がみな、
預言者となり、主が彼らの上にご自分の霊を与え
られるとよいのに」と言いました。預言は、主の
霊の働きです。エルダデとメダデのふたりが天幕
に來なかつたからといって、彼らにも主の霊が注

がれた以上、誰もそれをとどめることはできませ
ん。主の霊の働きを何よりも大切にしたいモーセラ
しい判断です。

これはまた、モーセが御霊の賜物が特定の人に
独占されるものではないと考えていたことを窺わ
せます。御霊の賜物を与えられた人がまるでそれ
が特権であるかのようにして独占し、他の人を支
配するようなことが、時にありますが、それは間
違っていません。「賜物」は「恵み」であつて、多
くの人に与えられるべきものなのです。使徒パウ
ロも「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求
めなさい」「教会を成長させるために、それが豊
かに与えられるように求めなさい」(第一コリン
ト 14・1、12)と教えています。

祈り 聖霊よ。あなたの賜物を、求めるすべての
人に与えてください。

あなたは、神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシユアを連れて来て、あなたの手を彼の上に置け。(18)

ヨシユアがモーセの後継者に選ばれました。ヨシユアはカナン偵察隊のひとりでした。他の者はカナンの地を悪く言いましたが、ヨシユアとカレブのふたりは信仰に立って民を励ました(民数記 14・6～9)。ヨシユアはまたモーセの従者としてモーセを補佐してきましたので、後継者として選ばれるのにふさわしいと言えます。

そうしたことと共に、ヨシユアが選ばれたのは、彼が「神の霊が宿る人」であつたからでした。今日でも、神の民を導き、その教会に仕える者には、「神の霊が宿っている」ことが不可欠な条件です。そうでなければ、その人の指導も奉仕も空回りしてしまうからです。

使徒パウロも、自分の後継者テモテに、神が与えたのは「臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊」(第二テモテ 1・7)であることを思い起こさせ、「自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によつて守りなさい」(同 1・14)と命じています。どんなに良い素質を持ち、能力を持つていても、その内に聖霊の宿っていない人はそれを守り、伸ばし、生かすことができなからです。旧約ではヨシユアの他にヨセフとダニエルが「神の霊の宿っている人」と呼ばれました(創世記 41・43、ダニエル 5・11)。しかし新約では「私たちのうちに宿る聖霊」とあるようにすべての真実なキリスト者に聖霊が宿っていると教えられています。これは大きな恵みです。祈り 聖霊よ。私たちのうちに宿り、神によつて与えられている良きものを守ってください。

私をあなたの御前から投げ捨てず、あなたの聖なる御霊を、私から取り去らないでください。(11)

旧約では「聖霊」は「神の霊」、「主の霊」、また「御霊」と呼ばれますが、「聖霊」とは呼ばれません。「聖霊」という呼び名は新約だけのものです。しかし、御霊が「聖なる」お方であることとは言うまでもないことで、詩篇 51・11の他、イザヤ 63・10、11には「主の聖なる御霊」、ダニエル 4・8、9、18と 5・11には「聖なる神の霊」という表現があります。

御霊が「聖なる御霊」と呼ばれるのは、御霊ご自身が聖なるお方であるからというだけでなく、人を聖なるものとするからです。新約には「御霊による聖別」という言葉が第二テサロニケ 2・13と第一ペテロ 1・2にあり、「聖なる御霊」は人

を「聖とする御霊」であると言われています。

ダビデの悔い改めの祈りである詩篇 51では、「神よ、私にきよい心を造り…」(10)という祈りと「あなたの聖なる御霊を、私から取り去らないでください」という祈りが対になっています。

人は自分で自分をきよめ、汚れのない心を造り出すことはできません。それができるのは、人の霊のうちに住み、人を内面から変えることができる御霊だけです。ですから、ダビデは「あなたの聖なる御霊を、私から取り去らないでください」と祈っているのです。聖霊によつてきよめられるとき、人は自らのうちに「揺るがない霊」と「仕えることを喜ぶ霊」を持つことができるようになるのです。

祈り 聖霊よ。私をきよめて、信仰の確信と喜びへと導いてください。

私はどこへ行けるでしょう。あなたの御霊から離れて。(7)

詩篇 139 篇は「主よ、あなたは私を探り、知っておられます」(1)という言葉で始まるように、神の不思議な知識、「全知」を歌っています。天にのぼっても、よみに下つても、海の果に逃れても、そこに神はおられる(8~10)と言って、神がどこにでもおられること、「遍在」をも歌っています。神である御霊もまた、どこにでもおられる「遍在」の神であり、また、「全知」の神です。詩人は、神がすべてを知っておられると言った後で「神よ。私を探り、私の心を知ってください」(23)と祈っています。神はとうの昔に私たちのすべてをご存知なのに、なお、「知ってください」というのは、神の「全知」が理論的、機械的なものではなく、自分の思いを神に知っていた

だきたいと願う心に対して、愛をもって知ってくださるといふことを表しています。それは神の「遍在」についても言えることです。神はどこにでもおられるのだから、「神よ。共にいてください」と祈る必要はないと言うなら、その人は神の「臨在」を正しく理解していません。もし、神の恵みがなければ、神がおられ、自分のすべてを見通しておられるということは恐ろしいことです。しかし、神が恵み深いことを知るなら、神が共にいてくださることが喜びとなり、大きな安心となります。信仰者はこれを「臨在」と呼び、それが聖霊によつて実現されることを信じています。ですから、主の臨在を追い求め、また、その中に憩うのです。

祈り 聖霊よ。私と共にいて、主の臨在へと導きその中に留めてください。

見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。(1)

イエスが「神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである」(ヨハネ3・34)と言ったように、イエスのメシアとしての働きは彼に授けられた聖霊によつてなされました。

イザヤ11・2には、その聖霊についてこう記されています。「その上に主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、主を恐れる、知識の霊である。」メシアは神の民の王ですから、王たる者に必要な「知恵と悟り」、「思慮と力」が求められます。さらに、神の民の王には「主を恐れ」、「主を愛し」、「主を知る知識」が必要

でした。イエスは王であるメシアとしてこれらを聖霊より受けました。

「知恵と理解、判断と勇氣、神を知る恵み、神を愛し、敬う心」は古くから「聖霊の七つの賜物」と呼ばれ、それはキリストだけでなく、キリストを信じ、キリストに従う者にも与えられる内面の賜物と理解されてきました。実際、イエス・キリストはペンテコステに弟子たちに聖霊を与え弟子たちは聖霊の賜物によつて、困難を乗り越えて信仰を守り、福音を伝えていきました。わずか一世代のうちに福音が当時の世界の至るところに宣べ伝えられ、教会が建てられていったのは、しるしや不思議のゆえだけではなく、こうした内面的な聖霊の賜物のゆえだったのです。

祈り 聖霊よ。今日の私たちをも、あなたたの七つの賜物で満たしてください。

神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。(1)

この言葉はイエスがナザレの会堂で朗読したもので、イエスはその時、「今日、この聖書のことばが実現しました」(ルカ4・21)と宣言しました。旧約の預言のほとんどがキリストに関する預言です。イエスは「あなたがたに言いますが、『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれています、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです」(ルカ22・37)などと語り、福音書は「預言者を通して語られたことが成就するためであった」「聖書が成就するためであった」と言って、預言がイエスによって成就したと告げています。

しかし、イエスのメシアとしての働きは聖霊によつてなされたものですから、預言は聖霊によつて成就したと言うこともできません。第二ペテロ2・21に「預言は、決して人間の意志によつてもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語つたものです」とある通り、聖霊は預言の与え主ですが、同時に、預言を成就するお方でもあるのです。

キリストに関する預言とその成就が細部に至るまでみごとに一致しているのに驚かされますが、聖霊は、キリストに関する預言だけでなく、キリスト者の信仰生活においても働いて、信仰者に対する神の約束も成就してくださるのです。祈り 聖霊よ。あなたによる約束はあなたによつてしか成就しません。自分の力ではなく、あなたに信頼し、その成就を見る者としてください。

しかし彼らは逆らつて、主の聖なる御霊を悲しませたので、主は彼らの敵となり、自ら彼らと戦われた。(10)

聖霊は人格ですから、知性と意志ばかりでなく、感情も持っています。聖霊は人の信仰を喜び、罪を悲しみます。ですから、聖霊を「悲しませる」罪が生じます。そして、聖霊を最も悲しませる罪は神の愛を無視し、それに逆らう罪です。イザヤ 63・8には「まことに、彼らはわたしの民、偽りのない子たちだ」とあり、神がイスラエルを神の民とし、愛とあわれみをかけてきたことが語られています。そうであるのに、彼らは神に逆らい、聖霊を悲しませたのです。

エペソ 4・30には、キリスト者が「贖いの日のために、聖霊によって証印を押されている」選別の民、御国の相続者なのだから、罪によつて「神

の聖霊を悲しませてはならない」と命じられています。「聖霊を悲しませる」罪は、聖霊の働きを受けている神の民が犯す罪です。

罪に対しては神の怒りが臨みます。北王国イスラエルの王となつたバアシャに神はこう言いました。「わたしは、あなたをちりから引き上げ、わたしの民イスラエルの君主としたが、あなたはヤロブアムの道に歩み、わたしの民イスラエルに罪を犯させ、その罪によつてわたしの怒りを引き起こした。」(第一列王記 16・2) 罪に対する神の「怒り」は、神の正義を表しますが、聖霊の「悲しみ」は、神のあわれみの愛を表します。その愛を知る者は、聖霊とともに自分の罪を悲しみ、悔い改め、赦しを願うのです。

祈り 聖霊よ。あなたの悲しみを私の悲しみとして、悔い改めることができますように。

谷に下る家畜のように、主の御霊が彼らを憩わせた。このようにして、あなたはご自分の民を導き、ご自分のために輝かしい名を成されました。(14)

きょうの箇所では、エジプトから脱出したイスラエルが水が分かれた海を渡って救われたときのこと回想されています。11節の「その中に主の聖なる御霊を置いた方」という言葉は、イスラエルを飲み尽そうとする水が、聖霊によって分けられたということを語っています。「谷にくだる家畜のように、主の御霊が彼らを憩わせた」とあるように、イスラエルは牧者に導かれた家畜の群れのように、聖霊に導かれ、平安のうちに海の底を歩いて渡ったのです。

このことは、私たちを取り囲むどんな困難の中にも、聖霊がおられるなら、また、私たちが聖霊

に信頼するなら、聖霊が困難の中に救いの道を切り開いてくださることを教えています。

きょうの箇所に続く部分では、神がイスラエルをエジプトから救い出してくださった御業を、もう一度見せてくださいとの祈りがあります。それは、「主よ。：どうかお帰りください」(17節)との祈りです。私たちが神のもとに帰ることには、神に「帰ってきてください」と祈ることはできませんから、この祈りは、神への悔い改めの祈りでもあったことでしょう。

私たちも、神に立ち返るとき、私たちを取り囲む困難から救われます。「主の御霊が彼らを憩わせた」とあるように、聖霊による平安へと導かれるのです。

祈り 聖霊よ。私たちをあなたの憩いへと導いてください。

わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。(27)

この箇所は諸外国に離散したイスラエルが再び約束の地に戻ることに預言です。同じ預言は11・14と21です。すでに与えられていましたが、36章の預言は、11章の預言よりもさらに詳しく、具体的にです。「わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする」とあって、神が神の民に聖霊を与え、律法を守らせると言われています。律法を与えられ、神のみこころを示されたのに、イスラエルはそれを守らず、諸外国に散らされました。律法は尊いものですが、それを守る思いや力がなければ、律法を知っているというだけでは救いとなりません。イスラエルの回復は、約束の地に帰

るだけでなく、神に帰ることではなければなりません。それで、この預言では、固くて死んだ「石の心」に替えて、柔らかくて生きた「肉の心」、「新しい心」、「新しい霊」が民に与えられ、民が本当の意味で「神の民」となると言われているのです。そして、それは「わたしの霊をあなたがたのうちに授けて」とあるように、聖霊によって実現するのです。

この預言は、新約では、聖霊による新生と聖化によって成就します。「それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです」(ローマ8・4)とあるように、聖霊が信じる者の内で働いて、神のみこころに従う歩みを与えてくださるのです。

祈り 聖霊よ。私が、神のみこころのうちに歩むことができるようにしてください。

神である主はこれらの骨にこう言う。見よ。わたしがおまえたちに息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。(5)

創世記には神がアダムのいのちの息を吹き込み、アダムが生きた者となったこと(創世記2・7)、また、神がアダムのあばら骨を取ってエバを造ったこと(創世記2・21、22)が記されています。エゼキエルに書かれている、枯れた骨に息が吹き込まれ、生きた人間となったという幻には、創世記に記された、神の創造の力と聖霊のいのちを与える力が背景となっています。

この幻はイスラエルの復興の預言ですが、同時に、罪の中に死んでいた者が聖霊によって新しく生かされることの預言でもあるのです。エペソ2・4、5に「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、

背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです」とあり、テトス3・5に「神は、私たちが行つた義のわざによつてではなく、ご自分のあわれみによつて、聖霊による再生と刷新の洗いをもつて、私たちを救ってくださいました」とある通りです。罪に死んで、枯れた骨のようになっていた者であっても、再びいのちが与えられる。それは、まさに神の恵み、あわれみによるもの、また、イエス・キリストの死と復活によるもの、そして、聖霊の、あらゆるものを生かす力によるものです。聖霊なしにはどんなのちも無く、聖霊によつて生かされないものも無いのです。

祈り 聖霊よ。常にあなたのいのちによつて私を生かしてください。

その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。(28)

この言葉は、ペンテコステの日、ペテロによって引用された言葉です。ペンテコステの日、そこに集まった百二十人の弟子すべてに聖霊が降りました(使徒2・1~4)。そこには老いた人も、若い人も、男性も、女性も、さまざまな職業、社会的地位の人たちがいましたが、その「一人ひとり」(使徒2・3)に聖霊が注がれています。ヨエルの預言のとうり「すべての人」に聖霊が注がれたのです。

聖霊はユダヤの人々ばかりでなく、サマリヤの人々(使徒8・14~17)、ローマの百人隊長コルネリウス(使徒10章)、エペソの弟子たち(使徒19・1~7)にも降りました。人種、民族、

国籍の区別なく、「すべての人」にです。

しかし、これらの人々には共通点がありました。それは神の言葉を聞き、イエス・キリストを信じ、心をひとつにして祈っていたということです。最初に聖霊を受けた百二十人は「心を一つにして祈って」いました(使徒2・14)。コルネリウスも日々の祈りを絶やさなかった人でした(使徒10・2)。コルネリスはペテロから神の言葉を聞こうと待ち構えており、エペソの弟子たちも、パウロによつて福音を聞かされ、「主イエスの名によるバプテスマ」を受け、聖霊を注がれました。イエス・キリストを信じる「すべての人」に聖霊が与えられるという預言は、新約の時代に成就したのです。

祈り 聖霊よ。あなたをお受けするために、御言葉に聞き、祈る信仰をお与えください。

あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている。恐れるな。(5)

神とイスラエルとの間に交わされた契約とは、神がイスラエルの神となり、イスラエルが神の民となるというものです。この契約はアブラハムから始まり（創世記17・7）、その子孫に受け継がれました。神はこの契約を忘れずアブラハムの子孫をエジプトから救い出し、十戒の冒頭で「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」（出エジプト記20・2）と宣言しています。レビ記26・12にはこうあります。「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしはあなたがたの神、主である。」

同じ契約はエレミヤ7・23、11・4、30・22、ゼカリヤ2・11に繰り返されています。

この契約に基づいて、「わたしの霊はあなたがたの間にとどまっている」、聖霊は民を離れ去ったのではないと言つて、神は、ゼルバベルとヨシユアを励ましているのです。イスラエルが神の民である以上、聖霊は離れることがなく、聖霊が共にいるなら、彼らは神の民であり続けます。イスラエルを神の民としているのは、神の愛と、あわれみ、恵みの契約なのです。

キリスト者はキリストの血によつて確立した契約によつて新約時代の神の民となりました。キリスト者は、この契約のゆえに聖霊が与えられ、神との契約の内を歩むことができます。

祈り 聖霊よ。私たちをキリストによる契約の内
に歩ませてください。

権力によらず、能力によらず、わたしの靈によつて。(6)

ゼルバベルはバビロン捕囚に遭つたユダヤ人の子孫で、バビロンで生まれ育ちました。ペルシャの時代になつて、ユダヤの人々が祖国に帰り、神殿の再建にとりかかりましたが、他民族の妨害を受け、困難をきわめていました。そんな時、ゼルバベルはユダヤ地方の総督になりました。人々は同胞のひとりが総督になつたことを歓迎し、ゼルバベルが帯びている総督としての権威や、その手腕に期待したことでしよう。ゼルバベル自身も、自分の能力を發揮する時がやってきたと感じたことでしよう。しかし、神は預言者を通して「権力によらず、能力によらず、わたしの靈によつて」と、ゼルバベルに告げました。神は人を用いますが、その能力ではなく、その信仰を用います。ゼ

ルバベルが神殿の再建とエルサレムの復興に果たす力は、彼のものではなく、神のものであり、聖靈の力であると、この言葉は語っています。

ゼルバベルへの預言は、今日のキリスト者にもそのまま当てはまります。キリスト者が何かをしようとするとき、とりわけ神の働きの関わろうとするとき、それを達成するのは、聖靈によつてでなければなりません。聖靈によらなければ、神のわざをなすことができず、人間の権力や能力によつては、人間的なものしか生みだすことしかできないのです。教会が人間的には榮えていても靈的に無力になつているとしたら、それは聖靈によるわざがなされていないからなのです。

祈り 聖靈よ。あなたによらないでは、神のための働きはできません。このことを私たちの胆に銘じさせてください。

彼らは心を金剛石のようにし、万軍の主がその御霊によって先の預言者たちを通して送られた、みおしえとみことばを聞き入れなかった。(12)

霊的な回復は神の言葉に聞き従うことから始まります。アモス3・7に「まことに、神である主は、ご自分の計画を、そのしもべである預言者たちに示さずには、何事もなさない」とあるように、神の言葉はまず預言者たちに示されました。ところが、神の民は預言者に聞かなかったのです。ゼカリヤはこう言っています。「先の預言者たちは彼らに叫んで言った。『万軍の主はこう言われる。あなたがたは悪の道と悪しきわざから立ち返れ。』しかし、彼らはわたしに聞かず、わたしに耳を傾けもしなかった。」(ゼカリヤ1・4)

預言者に聞かないことは、神に聞かないことなのですが、それは同時に預言者に神の言葉を語ら

せている聖霊に聞かないことにもなります。

教会の最初の殉教者となったステパノは当時のユダヤの指導者たちに、「うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。あなたがたはいつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです」(使徒7・51)と言いました。この言葉はゼカリヤの「彼らは心を金剛石のようにし、万軍の主がその御霊によって先の預言者たちを通して送られた、みおしえとみことばを聞き入れなかった」との言葉に通じます。私たちも、神の言葉に聞き従っているだろうか、聖霊に逆っていないだろうか、常に自らを点検する者でありたいと思います。

祈り 聖霊よ。聖書を通してあなたが語っておられる言葉に従順であることができますように。

ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリヤをあなたの妻として迎えないさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。(20)

新約で最初に「聖霊」という言葉を使ったのは、主の使いです。主の使いは、ザカリヤに、その子ヨハネについて「彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせませす」(ルカ1・15、16)という預言を与えました。次に同じ主の使いはマリヤに「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」(ルカ1・35)と告げました。ヨセフがマリヤの妊娠を知るようになったとき、主の使いはヨセフにも「その胎に宿っている子は聖霊によるのです」と、聖霊によ

る受胎を告げました。

聖霊による受胎は、世界でただひとり処女マリヤに、ただ一度だけ起こったことです。ヨハネは「母の胎にいるときから聖霊に満たされ」(ルカ1・15)でいたとしても、聖霊によって身ごもったものではありません。詩篇139・13に「あなたこそ私の内臓を造り、母の胎の内で私を組み立てられた方です」とあるように、どの人も神の手によって形造られ、聖霊から命を与えられて誕生したのですが、処女降誕ではそれ以上のことが起こりました。それはひとりの子どもが不思議な方法で生まれたというだけでなく、永遠の御子が人となるという神祕がその誕生によって実現したのです。そして、それを実現させたお方が聖霊なのです。祈り 聖霊よ。御子を世に來たせられたあなたの力を讃えます。

エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。(41)

マリアが受胎告知の後、バプテスマのヨハネの母エリサベツに仕えるため彼女を訪ね、挨拶したとき、エリサベツは、聖霊に満たされて、こう語りました。「あなたは女の中で最も祝福された方が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。」エリサベツが自分より年若いマリアにこんな最高の賛辞を述べたのは、人間の思いからではなく聖霊によってでした。エリサベツはマリアやヨセフとは違って、御子の受胎を主の使いから告げられはしませんでした。この時、瞬間的に聖霊によって御子の受胎を知らされました。それで、このような言葉を語ったのです。

御子の誕生は聖霊によるものですが、その御子にかかわる人々もまた聖霊に満たされ、聖霊によって御子についての啓示を受けました。

バプテスマのヨハネの父ザカリアは聖霊に満たされ、ヨハネの将来について預言をしました(ルカ1・67)。マリアとヨセフが生後四十日のイエスを神殿に連れてきたとき、そこにいたシメオンは「聖霊に導かれて」(ルカ2・27)幼な子イエスについて預言をしました。御子は聖霊によって生まれ、聖霊の満たしや導きを受けた人々がそれを証しました。御子の降誕のときには、イエスの公生涯やペンテコステ以後を思わせるような豊かな聖霊の働きがありました。私たちも聖霊によって、降誕の奥義を知る者となりたく思います。祈り 聖霊よ。御子であり、主であるお方を知るため、私たちを満たしてください。

私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。(8)

バプテスマのヨハネが授けていたバプテスマは、異邦人がまことの神に帰依するときに受けるバプテスマだと思われます。ヨハネは、それをユダヤ人に施すことによつて、人々に、ユダヤ人であることの特権を捨て、異邦人のようになって、神を信じ直すようにと迫つたのです。ヨハネが「あなたがたは、『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で思つてはいけません」(マタイ3・9)と説教した通りです。

そうであるのに、イエスはヨハネからバプテスマを受けました。それは、イエスが私たちの罪を背負い罪人のひとりとなるためであり、また、イエスが「聖霊によつてバプテスマを授ける」方で

あることを示すためでした。ヨハネはイエスに聖霊が降つたのを見て、イエスこそ私たちに「聖霊によるバプテスマ」を授ける方であると言つたのです(ヨハネ1・32、34)。

「聖霊によるバプテスマ」はペンテコステの日、弟子たちに聖霊が降つたことと、悔い改めてバプテスマを受ける者に聖霊が与えられること(使徒2・38)を指しています。

バプテスマには「浸す」という意味があります。

何かを水に浸すと、それは水の中に入り、水もまた、その中に入つてきます。そのように、私たちも、「聖霊によるバプテスマ」によつて聖霊の中に導き入れられ、聖霊が私たちの内に住まうようになり、聖霊の臨在と内住を体験するのです。

祈り 聖霊よ。常に私のうちに留まり、また、私をあなたのうちに留めてください。

すると天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」(11)

「愛」のシンボルは、現代では、「ハート」ですが、古代には「ハト」(鳩)でした。それで、イエスのバプテスマの時、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」という声とともに、聖霊が「鳩」のようにイエスに降つたのです。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」という言葉は、詩篇2・7の「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」と、イザヤ42・1の「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者」に基づいています。どちらも、「メシア預言」と言われているものです。これらの言葉は、イエスが神の御子であり、私たちの救い主であることを教えています。また、それとともに、父の

御子に対する愛と御子の父に対する愛が示されています。父と御子が聖霊の愛で強く結ばれていることを語っています。

そればかりでなく、「父、子、聖霊の名において」授けられるバプテスマにおいても、バプテスマを受ける者が、父、子、聖霊のまじわりの中に入れられることを保証しているのです。信じてバプテスマを受ける者は神の子どもとして父の愛を受け、キリストの証人としての使命を受けるのです。イエスに降つた聖霊は私たちにも与えられ、私たちは聖霊によって、神の子であることの証しを持ち(ローマ8・16)、神の愛を注がれる(ローマ5・5)のです。

祈り 聖霊よ。自分の受けたバプテスマを覚えるたびに、私たちがあなたによって神の愛を注がれていることを確信させてください。

それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた。(12)

バプテスマを受け、聖霊に満たされたイエスは、その後、すぐに荒野でサタンの試みを受けました。「聖霊に満たされる」と、どんな苦しみも、試練も遠ざかると考える人もありますが、この箇所は「聖霊の満たし」は私たちを試練から遠ざけるものというよりは、試練に立ち向かわせる力であることを教えています。

ペテロは神殿でイエスを宣べ伝えているとき捕まえられ、指導者や長老たちの尋問を受けました。ペテロはそのとき「聖霊に満たされて」、指導者たちや長老たちに、力強くイエスを証しました(使徒4・8)。ペテロが釈放されてから仲間のところに行き、彼らと共に祈ったとき、「一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出し」

(使徒4・31)ています。聖霊は、試練のただ中でこそ信仰者を支えてくださるのです。

イエスは聖霊に満たされてから荒野に向かいましたが、マルコは「聖霊はイエスを荒野に追いやった」と言っています。この「追いやる」という言葉は、人が家畜を向かわせたい方向に歩かせることを言うときに使う言葉です。聖霊はイエスに対して完全な主導権を持ち、イエスは聖霊に服従したことが、この言葉から分かります。父、子、聖霊は相等しいお方ですが、互いに仕えあい、服従しあつて、人の救いのために働いてくださるのです。特にイエスは私たちの救いのために聖霊に従順な者となつてくださったのです。

祈り 聖霊よ。主イエスでさえ、あなたに服従しました。私たちにも、あなたに服従する心を与えてください。

話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあつて話される、あなたがたの父の御霊です。(20)

権力者の前に立たされ、法廷に引き出され、福音を弁明し、立証しなければならなくなつたとき、人間的な後ろ盾を持たない弟子たちは、どのようにすれば良いのでしょうか。イエスは、自分の知恵や力でなく、聖霊が与えてくださる言葉によつて語れと教えています。

弟子たちは、このイエスの指示どおり、聖霊によつて福音を証してきました。ステパノは反対者に囲まれたとき、聖霊によつて語つたので、反対者たちは「彼が語るときの知恵と御霊に対抗すること」ができませんでした(使徒6・10)。パウロは「神の御霊の力」によつて宣教したと言つています(ローマ15・19)。そして、イエスを

証しするための「知恵」も「知識」も、神の奥義を語ることも、すべて聖霊から来ると言つています(第一コリント12・8、14・2)。

ペテロは、一度はイエスを否んだ人ですが、聖霊によつて、大胆にイエスを証しし、議会に引き出されてもうろたえることはありませんでした。それは、彼のうちにあつて語つてくださる聖霊に信頼したからです。それで、ペテロはこう言つています。「もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまつてくださるからです。」(第一ペテロ4・14) 聖霊に信頼するとき私たちは恐れから救われ、聖霊の与える言葉によつて力ある証ができるのです。祈り 聖霊よ。あなたが語つてくださるとの約束を信じ、福音を証しする者としてください。

人はどんな罪も冒瀆も赦していただけますが、御霊に対する冒瀆は赦されません。(31)

聖霊を「欺く」(使徒5・3)、聖霊に「逆らう」(使徒7・51)、聖霊を「消す」(第一テサロニケ5・19)、聖霊を「悲しませる」(エペソ4・30)、聖霊を「侮る」(ヘブル10・29)などは、すべて聖霊に対する罪です。その中で最も恐ろしい罪は聖霊への「冒瀆」です。

マタイ12章では、反対者たちは「この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ」と言いました。その目で聖霊のわざを見ながら、それを悪霊の働きだと言って、聖霊を冒瀆しました。イエスは神の御子であるご自分に対する冒瀆や、逆らう言葉は赦されても、聖霊を冒瀆することは赦されないと言いました。

イエスが来たのは、赦しをもたらすためです。

ですから、かつては神を冒瀆し、イエスに逆らっていた者であっても、聖霊がその罪を示し、悔い改めを促すとき、それに答えるなら、赦しを受けることができます。パウロは「私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らなかったことだったので、あわれみを受けました」と言い、

「『キリスト・イエスは罪人を救うために世に來られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」と言っています(第一テモテ1・13~15)。しかし、悔い改めと罪の赦しに導く聖霊に逆らい続けるなら、そこには赦しはないのです。祈り 聖霊よ。あなたに逆らっては赦しがないという厳かな事実をいつも覚えさせてください。

イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。(21)

七十二人の弟子たちは、「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します」と言つて、喜んでイエスに報告しました。しかし、イエスは弟子たちに「霊どもがあなたのために服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」(20)と言いました。自分たちが成し遂げたことを見て喜ぶのではなく、神が成し遂げてくださった救いのわざを喜べと、教えたのです。

ヨハネ1・12に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」とあるように、イエスは、弟子たちに悪霊を追い出す権威を授けただけでなく、「神の子どもとなる特権」を

与えました。「名が天に書き記されている」とは罪を赦され、神の子とされ、神の国の民となり、その相続者となるということです。パウロが「私たちの国籍は天にあります」(ピリピ3・20)と言つたのと同じ意味ことです。イエスは、弟子たちに、イエスの名によって悪霊が追い出されるのを見て、有頂天になるのではなく、同じイエスの名によって、神の子とされていること、天の御国の子とされていることを喜ぶように教えたのです。聖霊の賜物はどれも目を見張るものですが、聖霊が与える救いに優るものではありません。救いの喜びこそ、神の国の喜びであり、聖霊が与える喜びです。イエスご自身がこの喜びで満たされていたので、弟子たちにも同じ喜びを教えたのです。祈り 聖霊よ。あなたによる救いの喜びで私たちを満たしてください。

それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。(13)

イエスはここで、天の父の愛を信じて祈るようにと教えています。子どもが魚を求めているのに蛇を、卵を求めているのにサソリを与えるような親があるだろうかとありますが、現代では、自分の子どもを虐待する親が増え、そういうことを実際に見聞きするようになりました。親が子を愛するという、人間にとって最も基本的な部分さえ、罪のために歪められ、壊されているのは恐ろしいことです。しかし、それでも、親の子に対する愛はなお残されており、それは神の愛を諭えるものとなっております。親が子どもに良いものを与えようとするように、神は、神の子どもたちに最善・最良のものを与えてくださるのです。

そして、その最善・最良のものとは「聖霊」で

す。なぜなら聖霊は、人が望むすべての良いものを与え主だからです。救いも、神の子どもの身分も、信仰者を養い育てる教会も聖霊によつて与えられるものです。知恵のことば、知識のことば、信仰、癒やし、奇跡を行う力、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力などは聖霊が与える賜物です(第一コリント12・8〜10)。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制などは誰にも必要なもの、誰もが求めるものですが、これも聖霊が結んでくださる実です。神は私たちの必要を細切れに与えるのでなく、それらすべてを満たしてくださるお方、聖霊を与えてくださるのです。

祈り 聖霊よ。あなたは私たちのすべての必要に答えてくださるお方です。私たちはあなたご自身を求めて、絶えず祈り続けます。

そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいっまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。(16)

「もう一人の助け主」は新共同訳では「別の弁護者」と訳されています。「助け主」には「弁護人」という意味があるからです。しかし、聖霊は私たちを弁護する以上のことをしてくださるので、新改訳では「助け主」と訳されています。

また、原語で「別の」を表す言葉は二種類あって、ひとつは「別種類の」あるいは「異なった」という意味を、もうひとつは「同種類の」あるいは「同質の」という意味を持っています。この箇所では、後者が使われており、「もうひとりの助け主」と訳されています。

聖霊が「もう一人の助け主」と呼ばれているの

は、聖霊がイエスとは別の人格ではあっても、イエスの心を伝え、その働きを引き継ぎ、イエスを証言する、イエスと同質のお方であるからです。ヨハネ 16・14には「御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです」とあります。

さらにヨハネ 16・15に「父が持つておられるものはすべて、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに伝えると言ったのです」とあるように、父と子と聖霊がひとつであることが教えられています。信じる者は、この父と御子とのまじわりの中に入れていただけるのです。そしてそれは、「もう一人の助け主」である聖霊によつてなのです。

祈り 聖霊よ。あなたは御子と変わらないお方です。私たちを御子に導いてください。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいませ。(26)

イエスは世を去る前に、聖霊について、多くのことを弟子たち教えました。なぜなら、イエスが世を去る目的のひとつは、弟子たちに聖霊を与えるためだったからです。イエスが次のように言った通りです。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」(ヨハネ 16・7)

ヨエル 2・28にあるように「すべての人が聖霊を受ける」のは世の終わりの出来事、言い換えれば神の国の始まりの出来事です。イエスはご自分

が世を去り、聖霊が来て、新しい時代が始まることを告げたのです。

しかし、イエスが去って聖霊が来ることは、聖霊がイエスに取って代わることを意味してはいません。聖霊は、私たちに「イエスは主です」(第一コリント 12・3)との告白に導くお方です。聖霊は主イエスに任せ、主を証しし、その栄光を表わすために来るのです。私たちは、この聖霊の証しによってイエスを知り、世に向かって、イエスを主として、証しすることができますようになります。聖霊はじつに証しの力です(使徒 1・8)。

聖霊を信じ、聖霊を尊んでいたとしても、イエスを主として崇めることがなければ、それは、聖霊を正しく理解しているとは言えません。

祈り 聖霊よ。あなたの証しによって、私たちも主イエスを人々に証しすることができますように。

その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにさせます。(8)

ヨハネ 14・17に「この方は真理の御霊です。

世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです」とあるように、聖霊を受け、聖霊によって教えられた人でなければ、聖霊を理解できません。信仰を持たず、聖霊によって生きることがなければ、聖霊のことは分からないのです。

聖霊は「世のもの」ではないからです。けれども、聖霊はこの世に対して何の働きもしないわけではありません。人が聖霊を受け入れる以前にも、聖霊は「罪について、義について、さ

ばきについて」人々の目を開き、信仰にいたる備えをしてくださるのです。

ここには、最大の「罪」が、神の遣わされた救い主を信じないことにあること、イエスの身代わりの死によって信じる者が「義」とされること、イエスの復活によって「この世を支配する者」に「さばき」がなされたことが記されています。

人は、最終的には、聖霊によって「イエスは主です」(第一コリント 12・3)と告白して救われるのですが、それに至るには「罪」と「義」と「さばき」について知る必要があります。聖霊はそのために、一般的、予備的な働きをしてくださっています。私たちは多くの人々がそうした聖霊の働きに答えるよう祈ることができると祈ります。祈り 聖霊よ。罪と義とさばきについて世の人々の目を開いてください。

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来るとあなたがたをすべての真理に導いてくださいます。(13)

聖霊はヨハネの福音書で「真理の御霊」(ヨハネ 14・17、15・26、16・13)と呼ばれています。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ 14・6)とあるように、イエスご自身が「真理」なのですが、弟子たちはイエスに召され、訓練を受けた数年の間だけで、真理であるイエスをすべて知ることができませんでした。イエスは復活の後弟子たちに、聖書を解き明かし、弟子たちは、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(ルカ 24・46、47)という、神の救いの計画の「ビッグ・ピクチャー」

(全体像)を得ましたが、すべての真理に至ったわけではありませんでした。

「使徒の働き」には、聖霊が、教会の進展にそつて、使徒たちに真理を啓示し、教会を導いていく様子が描かれています。教会は常に聖霊に耳を傾け、聖霊に教えられました。

ところが、後の時代になると「異なった霊」による教えが教会に入り込んできました。主イエスを告白することなく、真理から離れたものが「これは聖霊による啓示である」と言つて信仰者を惑わし、教会の中に蔓延することもありました。ですから私たちはどの「霊」にも従うのではなく、真理であるキリストに導く「霊」を見極め、聖霊に従う必要があるのです。(第一ヨハネ 4・1)

祈り 聖霊よ。私たちを真理であるキリストに導いてください。

父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。(19~20)

「父、子、聖霊の名において」は、バプテスマのときばかりでなく、教会の礼拝で、また、個人の祈りで何度となく繰り返される言葉です。礼拝や祈りでこの言葉が使われる時、私たちは「父と子と聖霊であるひとりの神を信じます」と、三位一体の神への信仰の告白をします。

この言葉を原語で見ると、「父、子、聖霊」は三つで複数なのに、「名」は単数です。英語で “In the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit” と訳されるように、「名」は “names” ではなく、“name” です。これは、「父、子、聖霊」がひとつであること、父も、子も、聖霊もともに等しい神性を持っている

ことを言い表しています。聖霊を人格と神性を持ったお方ではなく、神の力や影響力に過ぎないと言う人がありますが、そうした主張が全く成り立たないことは、この言葉によつて明らかです。

バプテスマは人が生まれかわり、罪からきよめられ、神の子どもとされることを表します。この救いは父なる神のみこころから出て、御子がそれを成し遂げ、聖霊が信じる者に与えてくださるものです。救いは、父と、子と、聖霊によるのです。

バプテスマを受けた者がイエスの教えに養われ、イエスの弟子となっていくこともまた、聖霊によるのです。ですからキリスト者はいつも「父、子、聖霊の名において」と唱え、それを心に刻むのです。

祈り 聖霊よ。私を、常に、父、子、聖霊の名において生きるものとしてください。

『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も読むようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。

一、読む 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問い、聖書に答

えてもらうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによつて、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」は神とのまじわりに「留まる」こと、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言ひ換えることもできます。

Penguin Club のブックレット

目からうろこ — 日常生活の聖書

ふだん何気なく使っている言葉の中にも聖書の言葉が含まれています。そんな聖書の言葉がどこから来て、どんな意味を持つのかを解説した小冊子です。

讃美歌物語

讃美歌ほど世界中で、多くの人々に、長く歌われてきた歌はありません。この冊子では、古今東西の名曲のいくつかからそのエピソードを紹介しています。

アメリカの祝祭日

アメリカの祝祭日のほとんどがキリスト教に基づいています。それぞれの祝祭日の歴史を知って、キリスト教とアメリカの社会のつながりを理解することができます。

日々の聖句

毎日、聖書の数節を読み、それを黙想するための手引です。聖書の言葉は、月ごとの主題にしたがって聖書全体から選ばれています。聖書の主題別の学びにも適しています。

いずれも、印刷版、PDF版、MOBI版があります。ご注文は penguinclub.net/order.html から、お問い合わせは、Penguin Club ホームページの「コンタクト」にあるメール・フォームをご利用ください。



Penguin Club

www.penguinclub.net